

## IV おわりに

平成22年（2010）診断分の広島県のがん登録報告書が完成いたしました。平成21年（2009）診断分の報告書が公表されて間を空けることなく完成したことで、現時点から遡ること4年の時点のがんの状況がまとめられていたこれまでに比べて、1年早く結果を見ることができるようになったということになります。即時性の改善が得られたことを広島県のがん登録にご協力いただきました皆様とともに喜びたいと思いますし、お忙しい中ご努力を賜りました放射線影響研究所に深甚の謝意を表したいと思えます。

さて、この報告書は将来振り返って眺めた時に、大きな転換点で作成された報告書として銘記されるようになるのではないだろうかと考えています。その理由の一つは、今の時点がわが国で初めての「がん登録法」が成立する直前であるということであり、その二つ目は広島県のがん登録報告書で初めて生存率の記載がなされたということです。すなわち前者はがん登録が初めて法律によって定められた事業となるということであり、がん登録の存立基盤が明確になるという意味で画期的なことと言わざるを得ません。これからは国ががん登録を行うことになり、病院からのがん資料の提出は病院の義務になるでしょう。できるだけ多くのがん資料を集めるという完全性の向上が期待されます。地域でがん登録に携わる者としましては、収集するがん資料の充実を図り、それに従事するがん登録士の育成に力を注ぎたいものだと考えております。さらに収集した資料をいかに利活用していくかが問われる時代が来たことを感じる次第です。一方、後者によって5年相対生存率という形で臓器別に生存に関する成績を示すことができました。全部位での5年相対生存率は66.6%（男性：65.0%、女性：68.7%）であり、最も高かった前立腺では98.3%、最も低かった膵臓では8.5%でした。がん死亡を減少させようとがん対策を推進している現状において、ここに示された指標が今後の治療や対策によってどのように変化していくか、医療のみならず公衆衛生の立場からも興味をそそられるところです。

以前から50歳以前では女性のがん罹患が男性よりも多くみとめられてきました。乳房、子宮、卵巣に加えて甲状腺を発生母地とするがんが、若年から多く発症してくるからです。これを年齢調整罹患率の年次推移で見ますと、乳がん（女）の上昇傾向が続き、子宮がん（女）や甲状腺がん（女）、肺がん（女）も増加していましたが、逆に大腸がん（男女）や、肝および肝内胆管がん（男女）は減少傾向を示しました。肺がんは男女ともに最も死亡数の多い予後の悪い（5年相対生存率：36.4%）がんの一つとして知られていますが、年齢調整死亡率で見ますと男女ともに平成20年（2008）をピークに下がり始めている様子がうかがわれ、将来への期待を持たせるものでした。

改めてこの報告書を開きますと、その内容の充実度を実感することができました。広島県のがん登録にご協力いただいております医療機関の皆様にお礼を申し上げます。広島県、放射線影響研究所、および広島県医師会の強い連携と信頼関係を再確認し、今後への発展を誓いたいと思えます。

平成25年（2013）5月

広島県医師会常任理事  
有田 健一